

## はじめに

フランス人言語学者シャルル・アグノエルは、1930年(昭和5年)に沖縄県島尻郡糸満町(現 糸満市)を訪れ、アガリミチブシという星名を記録した。また、ロシア人言語学者ニコライ・ネフスキーは、1922年(大正11年)、1926年(大正15年)、1928年(昭和3年)の3回に渡り宮古島を調査し、ウプラウサギをはじめとする多様で豊かな星名を記録した。今日においても、糸満では、アガリミチブシへの祈りが、宮古島においてはウプラウサギ等の星名伝承が伝えられている。

本研究では、大正終わりから昭和はじめの時期に言語学者が記録した伝承が現代も伝承続けられている点に注目するとともに、それらの伝承内容について天文民俗・天文考古および認知天文学的な分析・考察を試みる。

### 1. シャルル・アグノエルによるアガリミチブシの記録

1429年、山巔毛(さんていんもう)で他魯毎は、中山(ちゅうざん)の尚 巴志王(しょう はしおう)の攻撃を受けて妻子とともに自害した。南山王国は滅ぼされたのである。山巔毛には、南山王国最後の王、他魯毎(たるみい)の墓がある。そして、その墓のある山巔毛から見ると、南山城址の方からのぼるのがアガリミチブシ(オリオン座三つ星)である。山巔毛から南側は埋め立てられてしまっているが、かつては海であった。海に向けそびえ、南山城址からアガリミチブシをのぼる景観のなかでアガリミチブシへの祈りが続いていた。

シャルル・アグノエルは、アガリミチブシ(agari-mitsibusi(hoshi))について、「東ノ三星[les trois e(/)toiles de l'Est]」「ten no kami(天の神)[dieux du ciel]」と記している。即ち、アガリは、「上がる」という意味ではなく、「東」という意味である[1]。

南山時代に遡るアガリミチブシへの祈りは、旧暦5月1日の朔日拝み(チータチウガミ)において次のようなアガリミチブシへの祈りは行なわれていた。しかしながら、ノロが不在になり現在は行なわれていない。

「アガリミチブシ ニーヌファ ウマヌファ ヌ グエーサチ ダヤビル」(東り三星 子の端 午の端 のお声がけで あります)

「ミティン サンティン ルーグシン トウヌ グエーサチ ダヤビル」(御天 山巔 竜宮神 との ごあいさつ であります)

「アガリミチブシ ニーヌファ ンマヌファ ヌ グエーサチ ダヤビル」(東三つ星 子の端 午の端 のごあいさつ であります)(金城善氏による祈りの記録[2]。)

金城善氏は、「筆者は、南山王統の三代の王たちが空に昇っていくのを拝んでいるのではないかと考えるが、アグノエル博士は『東ノ三星』は天の神であると、糸満ノロから聴いている」と記している[3]。

旧暦5月4日(ユッカヌヒー)の頃はオリオン座三つ星がのぼる様子を実際に見ることはできず、太陽の横の方にあるのを拝んだ可能性を考える。神役の玉城氏はアガリミチブシでなくミウミサマに祈りを

捧げていたが、星ではなくウティン(太陽)であった。確かに、図1のように確かにその太陽の右のほうにはオリオン三つ星が存在する。

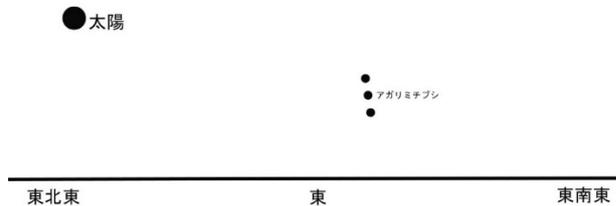


図1 1429年6月5日午前6時35分、日の出1時間後 糸満



図2 アガリミチブシの香炉

オリオン座三つ星が高度10度くらいになったとき、山巔毛から南山城址の上に相当するアガリミチブシにノロが祈っていた場所は金城善氏の記憶では図2の③の付近である。しかしながら、アガリミチブシの香炉が後に②に設置された。ウヌファ(卵の端)の香炉①の南側③付近に設置されるべきなのが、北側②に設置されてしまった。

そこで、神役は本来ならアガリミチブシの祈る場所に近い①(ウヌファの香炉)をアガリミチブシの香炉と判断して祈りを捧げていた。そして、②(アガリミチブシの香炉)を卵の端の香炉と判断して最後に祈った。

## 2. アガリミチブシについての議論

シャルル・アグノエルが記録したアガリミチブシは、現時点で記録されている事例は、大城政秀氏(明治38年生まれ、元糸満市史編集委員会委員長)による下記のみである。大里出身の大城氏は、アガリミチブシという星名を伝え聞いていたが、字糸満ではタティーブシと記していた。

「冬の空のやや南天に見られる星で、オリオン座の三つ星のことである。字糸満では、タティーブシという。東の空から上がるとき、縦一列に並んでいるところから、そう呼ばれている。アガリミチブシが、夏真上になると夜明け前で、冬は低く下がった頃に夜が明ける」[4]。

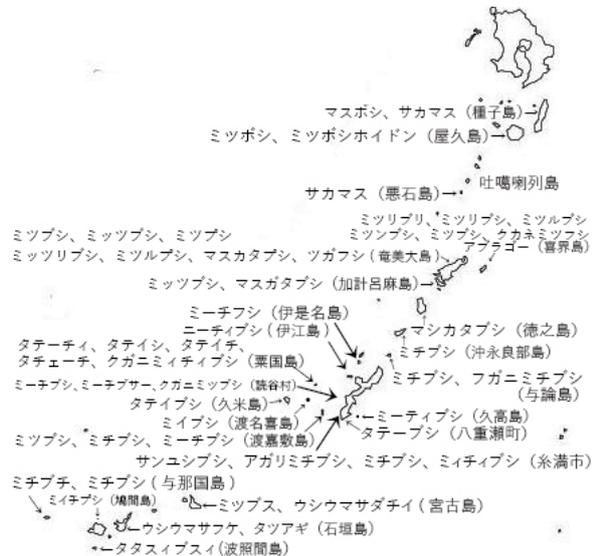


図3 南西諸島のオリオンの星名

2022年5月～6月、大里にて北尾が確認した範囲ではアガリミチブシという星名を記録できなかった。また、北尾が字糸満で実施した調査で昭和6年生まれから記録したのはミイチブシであった。アガリをつけなかったか確認したが、アガリをつけた事例は聞いたことがないという回答であった。

### 3. ノロ不在での祈り

2022年6月2日 8時20分頃、糸満市大里の山川ノロの殿内で祈りがはじまった。かつては、朔日拝みでアガリミチブシへの祈りが行なわれたが、現在は、ノロが不在となり、朔日拝みは行なわれていない。旧暦5月4日の山巔毛での祈りの前に糸満市大里の山川ノロの殿内において、神役が祈るがその際にアガリミチブシの祈りは捧げられていない。



図4 大里の山川ノロの殿内

### 4. ニコライ・ネフスキーによるウプラウサギ等の和名蒐集

ネフスキーは、1922年(大正11年)、1926年(大正15年)、1928年(昭和3年)の3回に渡り宮古島を調査し、数多くの星名を記録した。ニコライ・A.ネフスキー著、平良市教育委員会編『宮古方言ノート上』(平良市教育委員会, 2005)には、次のような星名が掲載されている[5]。なお、カタカナは筆者(北尾)が追記したものである。

- ビキラブス bikir a-busi 男子星ノ意。牽牛星。biki-r a : 男子 p113  
ブナラブス bunar a-busi 女子星ノ意。織女星。Bunar a : 女子 p125  
フニブス funi-busi 船星ノ意。北斗星。 p184  
ユズフォーブス ju:zfo:busi 宵の明星 [沖縄本島、jwbamman ə a:] p314  
ナガズーフス naga ɜ u : busi 彗星 p.568.  
ニヌパブス ni:nu p a-busi 「子ノ方星」ノ意。北極星。p617  
『宮古方言ノート下』には次のような星名が記されている[6]。  
ポーキフス po:k'i-fusi 「箒星」ノ意。彗星。p93  
プシガマ pusi-gama 小星 p115  
ウシムマピキブス usi-mma-p'ik'i-busi 「牛馬引星」ノ意。牽牛星。p376  
ウフニブス uhu:nibusi 北斗(船星) uhu:ni : 大船 p430  
ウプラウサギ upura-usagi 明けの明星 upura : 大浦。平良村ノ大字。p481

南西諸島の星名については、野尻抱影氏著『日本の星』(中央公論社)の大きな仕事があるが、石垣島を中心に記述され、宮古群島についての記述はない。拙著『日本の星名事典』(原書房)に1980年代実施のアンケート調査により記録した次の星名を掲載したのみであった。

#### (1) 群れ星

- ・宮古郡多良間村…ムニブス(ムニブス(群れ星)の動きで時間を知り、潮の満干がわかった)
- ・平良市(現 宮古島市)…ンミブス
- ・宮古郡上野村(現 宮古島市)…ンミムヌブス(ンミムヌブスは、男7人の兄達が群れになっている)

「ンミ」とは、「群れ」、「ブス」は「星」で、昴(プレアデス星団)を意味した。

(2) 牛と馬を連れている星

・沖縄県平良市(現 宮古島市)…ウスウマサダティブス(牛馬サダティ星)…牛と馬を連れて(サダティ)いる星。サダティとは「連れる」という意味。わし座アルタイル(牽牛)と $\beta$ 、 $\gamma$ を意味する。

平安時代中期の辞書である源順著『倭名類聚抄 天部第一』に、「牽牛 和名比古保之又以奴加比保之」とある。 $\beta$ 星 $\gamma$ 星を犬に見立ててイヌカイボシ(犬飼星)と呼んだのであるが、宮古島では牛と馬に見立てた。

また、拙著『日本の星名事典』に掲載していないものの、『天界』(東亜天文学会発行)に次のように星名を報告した。

・多良間村…「アンケート調査による南西諸島の星の民俗」『天界第 706 号、1984 年 3 月』

・平良市、上野村、城辺町(現 宮古島市)…「[続]アンケート調査による南西諸島の星の民俗」『天界第 711 号、1984 年 8 月』

(1) 多良間村

・プレアデス星団…ムニブス ・北極星(こぐま座 $\alpha$ 星)…ニヌハブス

・北斗七星(おおぐま座 $\alpha$   $\beta$   $\gamma$   $\delta$   $\epsilon$   $\zeta$   $\eta$ )…ナナツブス

・明けの明星…シェーカブス ・宵の明星…ユイフーブス ・流れ星…ペードゥリブス

(2) 平良市松原(現 宮古島市)

・プレアデス星団…ンミブス ・オリオン座三つ星…ミツブス ・北極星…ニヌパブス

・北斗七星(おおぐま座 $\gamma$   $\delta$   $\epsilon$   $\zeta$   $\eta$ )…フニブス

・わし座アルタイル(牽牛)…ウスウマサダティブス ・南十字星…ウマヌパブス、ウヤキブス

・明けの明星…ウプラウサギ ・宵の明星…ユス° フオブス

(3) 上野村(現 宮古島市)

・プレアデス星団…ンミムヌブス ・北極星(こぐま座 $\alpha$ 星)…ニノパブス

・北斗七星(おおぐま座 $\gamma$   $\delta$   $\epsilon$   $\zeta$   $\eta$ )…フニブス

・わし座アルタイル…ウシウマピキブス ・明けの明星…シャーカアガリヤ

・宵の明星…ユス° ファウブス ・流れ星…ナガゾウブス

(4) 城辺町

・北極星(こぐま座 $\alpha$ 星)…ニヌハブス ・北斗七星(おおぐま座 $\gamma$   $\delta$   $\epsilon$   $\zeta$   $\eta$ )…フニブス

・明けの明星…シャーカブス

以上の宮古群島の星名の記録と比較すると、『宮古方言ノート上、下』の約 100 年前の星名の記録には、次のような特筆すべき点があった。

(1) 船星という星名ー北斗七星より2つの星を除く

北斗七星は七つの星で柄杓の形になるが、そのうちの  $\alpha$   $\beta$  を除くと船の形になる。多良間島のナナツブスは7個すべてであるが、宮古島はそのうちの5つを認知して船に見立てたケースが分布していた。



図5 船星 湯村宜和氏撮影

(2) 北極星は子ノ方星

ネフスキーは、ni:nu p a-busi 「子ノ方星」ノ意と記している。宮古群島には広く子ノ方星が分布している。

(3) 牽牛は、牛馬引星ーオリオン座三つ星を意味するケースもある

上野村と共通。平良の牛馬サダチ星に通ずる。なお、北尾が 2019 年 11 月に宮古島市城辺保良において S さん(大正 15 年生まれ)からウシウマサダチを記録した。S さんは、いちばん上の星(オリオン座  $\delta$ )が牛、真ん中の星(オリオン座  $\epsilon$ )が人間、いちばん下(オリオン座  $\zeta$ )が馬で、秋にのぼる三つの星であった。最初に S さんに三つ星が横に並んだ図を見せるとちがうと言われ、縦にすると、そのとおりでであるという答えが返ってきた。明確に秋のオリオン三つ星がたてに三つ並んでのぼってくる様子を自ら観察してウシウマサダチと呼んでいた。石垣島のウシウマサフケ(白保)もオリオン三つ星であった。同じ名前が異なる星を認知する事例である。

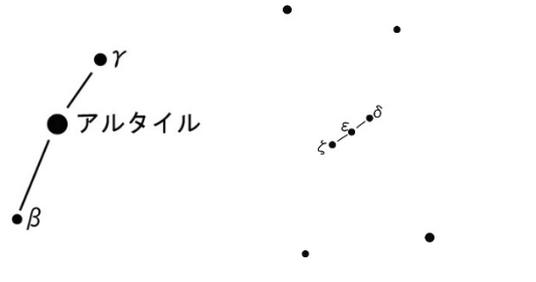


図6 アルタイル(牽牛)と  $\beta$   $\gamma$  図7 オリオン座三つ星

(4) 宵の明星は ju:zfo:busi

平良市松原のユス° フオブスのユス° は夕飯の意、フオは食べるの意、「夕飯を食べる星」という意味になる。「沖縄本島、jwbamman ə a:」とあるが、2021年 11 月、那覇市首里鳥堀町でユウバンマンジャーを記録。マンジャーは、「ほしがっている」という意味で、夕飯を欲しがっているように宵の明星は輝く。伊是名島においては、「夕食を早く準備しないと、ユウバンマウヤーに食べられてしまいますよ」「マウヤーとは、食べたそうに眺めていること」と伝えられていた。昔は、星と暮らしが近かった。暮らしの中に星があった。だからこそ、宮古島、沖縄本島、沖縄本島周辺島嶼部では、夕飯のときに輝く星をその夕飯の景観とともに認知して名前にした。そのことを100年前ネフスキーは記録していたのである。

(5) 明けの明星はウプラウサギ

ウプラウサギという星名に出会ったのは、1984 年に実施したアンケート調査であった。平良市久貝(現 宮古島市)の老人福祉センター Y 氏が平良市松原の老人クラブより「ウプラウサギ」という名前を聞いたとの回答が来たのだった。ただ、ウプラウサギのウサギに下線を引いて「兎」と明記されていたので、明けの明星が兎のように跳ねるのを認知して星名が形成されたと誤解してしまった。ウサギが祈

願、献上、捧げるという意味であることを知るのほさらに後であった。本報告では、ウプラウサギについて、伝承資料の多様性に注目しながら考察を進めたい。

2019年11月、宮古島市松原のS氏(昭和5年生まれ)は、ウプラウサギについて語りはじめた。

「ウプラウサギ ゆーあき(夜明け)や。池間島いけばよくわかるのところがうか。夜明け3時か4時に出る」

「ウプラウサギ、東側にアガスに出る。東のほうに夜明けに見える。相当、光る星。アガスに出る」

ウプラウサギという言葉の意味は伝えていなかったが、2019年までウプラウサギという星名が伝承されていた。そして、同年、『宮古方言ノート下』にネフスキーがウプラウサギを次のように記録していることを知った。

upura-usagi 明けの明星 upura:大浦。平良村ノ大字。

続いて、『ゆがたいー宮古島の民話第四集』(宮古民話の会、1984年)に、佐渡山安公氏再話による「明けの明星のお話」が掲載されていることを知った。伝承者は、ST氏(大正8年生まれ)であった。

「ニシャグ豊見親(とうゆみや)とマイティ豊見親は、毎日、戦さばかりやっていた。マイティ豊見親(とうゆみや)は、ニシャグ豊見親を急襲して滅ぼす。大浦は、マイティ豊見親が支配するようになる」

「沖縄へ来いと呼び出しがかかる。私が帰れない時は明け方の星となって帰って来ようと出発したが、マイティ豊見親は宮古に帰ることができなかった。そして、明け方、大きな星が東の空に現われるように。あれは、マイティ豊見親だ！ ウプラウサギだ！と拝むようになった」[7]

沖縄伝承話資料センターの東アジア民話データベース(沖縄国際大学口承文芸研究会による平成8年の記録)によると、高良氏聴収の平良市大浦、OS氏(明治42年生まれ)の事例は全く別のタイプの話の話を伝えている。

・ニシャグ豊見親とマイティ豊見親は敵対していたが仲直りした。

・ウプラウサギの原因になったのは、「大浦湾にやってきた得体の知れない船に矢を射ったこと」

矢は船員の一人に刺さった。船に乗っている人は外国人で、「矢を射った者は罪人なので連れて行く」と言った。マイティ豊見親が自分だと名乗ると、一緒に連れて行かれた。

皆に「夏の日明け方、西の方から大きな星が出るようであれば、それを私の魂とってくれ」と言った。月日が経ってもマイティ豊見親は帰って来ることはなかった。「大浦(ウプラ)ウサギ」という星名は共通であったが、見えるのは東でなく西だった。

また、NPO法人沖縄伝承話資料センター提供資料の平良市大浦のSN氏(大正11年生まれ)の伝承事例では、マイティ豊見親は、弓の上手な人だった。マイティ豊見親は、仲宗根豊見親(なかそねとうゆみや)の前か後か不明であった。中国の人が攻めてきたのでマイティ豊見親がやっつけて全滅みたいになった。明けの明星になったのは、マイティ豊見親ではなく、ニシャグ豊見親。明けの明星が見えるのは東でなく西であり、名前は、大浦(ウプラ)ウサギ星(ブス)とニシャグぬ星(フシ)の二種であった。ウサギとは、線香をあげなさいということだった。

ウプラウサギからニシャグぬ星へ… 西に見えるのは金星ではない。明けの明星が金星なら、西に見えることはない。一般的に明けの明星は、金星のことを意味する。しかし、明け方、西の空に例えば

木星が明るく輝くこともある。火星やシリウス等の一等星が輝くこともある。それらをニジャグぬ星と呼ぶことも大いに考えられる。明けの明星(金星)は東だから西はあり得ないと断定してはいけないと思う。

## 5. ニコライ・ネフスキーと稲村賢敷

ニコライ・ネフスキーは1918年小樽高等商業学校(現 小樽商科大学)のロシア語教師となった。1920年、宮古島出身の稲村賢敷(いなむらけんぷ)氏と出会い、宮古島の方言の研究に取り組むこととなった。ニコライ・ネフスキーと稲村賢敷は、1922年(大正11年)、宮古島を歩く。平良出身の稲村と歩いたため、星名は平良付近で記録されたものが含まれており、北尾のアンケート調査で平良で記録したウプラウサギをネフスキーも記録していることはその証拠と考えていた。



図8 小樽商科大学

ニコライ・ネフスキーは、ウプラウサギのウプラは大浦であることを明記しており、実際、大浦も調査で訪問していた。

また、稲村賢敷氏は『宮古島旧記並史歌集解』にてウプラウサギについて次のように記していた[8]。  
(「うぷらくーら」又「うぷらうさぎ」は明けの明星のこと、語彙は不明 最後に来る者、しんがりする者にも「うぷらうさぎ」という)

大浦との関係に言及していないのが疑問であった。

## 6. ウプラウサギの記録の意義

1922年(大正11年)～1928年(昭和3年))にネフスキーが記録したウプラウサギが、当時は幼児であったST氏にも伝えられ、さらには、生まれていなかった昭和5年生まれのS氏に伝えられていた。

野尻抱影『日本の星』以降、数多くの星名が記録されてきたが、異なる時代に複数の調査者によって記録された事例は少ない。ともすると、一人の調査者による報告に過ぎない星名も多く存在する。その点、本ケースは100年近くの間時間軸のなかで次のようにロシア人言語学者、宮古島の佐渡山氏、沖縄国際大学口承文芸研究会、全国の星名調査を実施する北尾による記録という次のような5つの方法が実施された。

- (1) ネフスキーによる大正末～昭和初めの記録
- (2) 佐渡山安公氏による1982年(昭和57年)の記録
- (3) 沖縄国際大学口承文芸研究会による1996年(平成8年)の記録
- (4) 北尾が1984年(昭和59年)に実施したアンケート調査による記録
- (5) 北尾による2019年(令和元年)の聞き取り調査による記録

これらの時期と調査者の異なる調査は、ウプラウサギという星名分布の信頼性を高めるものであった。一方で星名ウプラウサギを使用しているてもその言葉の意味は北尾の記録した時期には伝承されなくなっていた。

## 7. ウプラウサギという星の認知から認知天文学的な試論—星の文化へ

ウプラウサギという星を生活のなかで見ると、時間を知るためという目的がある。人が、それらの時間を教えてくれる星に気が付いたとき、おそらく星の名前はなかったであろう。言葉が生まれる前に言葉がなくても real な生活のなかで星を目標にしたのではないか？ そして、星の名前が生まれるとき、星を語り物語が生まれるときを、「virtual の誕生のとき・文化が生まれるとき」と考えて試論を進めていく。

即ち、real な生活のなかでの明けの明星の認知によりウプラウサギの virtual な物語の形成されている。実在の人物かどうか、いつぐらいの人物かは不明である。「沖縄へ呼び出された」「外国の船員を弓で…」と多様性豊かな virtual な世界が形成される。同様の事例として、real に北極星を認知し目標にして、virtual に北極星の動きを発見する徳蔵の物語がある。そして、次のように real と virtual は、生活に必要な知識を共有する機能を果たし、さらに星文化を形成していく。

- real に起こったことのように、virtual で語られる。
- 語る人、語るときによって、virtual は多様性豊かに変化していく。
- real な生活に必要な知識が、virtual で語れることにより共有され伝承されていく。

即ち、星空に virtual な世界を描いた。マイティ豊見親も、ニシヤグ豊見親も描いた。戦ばかりしていたと語ったり、仲良くしていたと語ったり、五感、六感で描いた。virtual は、一人一人の人間の持つ表現であり、文化であった。そして、real な星を見るという行為が繰り返され、virtual な伝承、昔話即ち日本の星文化が生まれるときを迎えた。

人間にとって、言葉が記号でなく文化であるからこそ、real と virtual のサイクルー伝承が消えていくことは、星文化を失うことにとどまらず、人間にとって必要な五感、六感、表現を失うことにならないかという危機を感じる。

おわりに

人間が星を見て語る、即ち星名伝承、さらには星の信仰に、星を認知し real と virtual を再発見する試論に取り組んだ。人間にとって、必要な観察力、表現する力、語り伝える力、そして、星の文化が生まれるとき…という試論のなかで、星の信仰、年中行事等の重い課題がさらに前に立ちはだかった。繰り返し語り、繰り返し祈る営みをさらに記録し続けていきたい。

また、星名の調査から今回のテーマとしたウプラウサギ以外に見えてきたものがある。それは、おおぐま座  $\alpha \beta \gamma \delta \epsilon \zeta \eta$  を認知天文学的分析を行なうことである。宮古群島には、多良間村のナナツブシはおおぐま座  $\alpha \beta \gamma \delta \epsilon \zeta \eta$  全体の数を認識してナナツブシという星名形成がされた事例と宮古島の船星のように  $\alpha \beta$  を除いた  $\gamma \delta \epsilon \zeta \eta$  の形状を認識して船星という星名形成がされた事例がある。両方の事例が発生することを認知天文学で議論するとき、次のように認知する対象の星の等級と星と星の間の距離の考察が必要となる。

- $\alpha \beta \gamma \delta \epsilon \zeta \eta$  のなかで、柄杓の柄のつけ根にあたる  $\delta$  星のみが三等星、他の6つの星は二等星である。柄杓の柄のつけ根の星が、例えば三等星でなく五等星なら、柄杓の形を描くのは難しくなったかもしれない。おそらく、北斗七星とは呼ばれなかったのではなかろうか。

・ $\alpha$ 星と $\delta$ 星、 $\beta$ 星と $\gamma$ 星の距離がもう少し大きければ、 $\gamma$ 、 $\delta$ 、 $\varepsilon$ 、 $\zeta$ 、 $\eta$ 星を結んで船の形に見た「船星(フニブス)」という星名は形成されても、北斗七星や、同じく七つの星を結んで船の舵の形に見た「舵星(カジボシ)」という星名形成の可能性は小さかったのではないだろうか。

$\delta$ 星が三等星、他の六つの星が二等星で、なおかつ、 $\alpha$ 星と $\delta$ 星、 $\beta$ 星と $\gamma$ 星の間隔がちょうどよいくらいであったので、七つの星と $\gamma$ から $\eta$ 星までの五つの星の名前の両方が生まれることになったということになるが、そのちょうどよい間隔というものがどのようなものか、心理学的な実験を通して解明していくことが今後の課題となる。

#### 参考文献

- [1] Patrick Beillevaire, OKINAWA1930 NOTES EHENOGRAPHIQUES DE GHARLES HAGUENAUER (2010) p69
- [2]大里字誌編集委員会『大里字誌』(糸満市大里公民館, 2009) p681-687
- [3]金城善「フランス人東洋学者シャルル・アグノエルが訪ねた昭和五年の糸満町」『沖縄民俗研究第33号』(沖縄民俗学会, 2014) p45-47
- [4]大城政秀「天文」『糸満市史資料編 12 民俗資料』1991、p374
- [5]ニコライ・A.ネフスキー著、平良市教育委員会編『宮古方言ノート上』(平良市教育委員会, 2005)
- [6]ニコライ・A.ネフスキー著、平良市教育委員会編『宮古方言ノート下』(平良市教育委員会, 2005)
- [7]下地富雄、佐渡山安公「明けの明星のお話」『ゆがたい-宮古島の民話第四集』(宮古民話の会, 1984) p67
- [8]稲村賢敷著『宮古島旧記並史歌集解』琉球文教図書、1962、p.393-401。